

《受賞関係》

朽津耕三先生の勲二等瑞宝章受章



山内 薫 (化学専攻)

kaoru@chem.s.u-tokyo.ac.jp

この度、本学名誉教授、朽津耕三先生が、平成11年秋の叙勲で勲二等瑞宝章を受章されました。このことは、われわれ化学教室一同にとりまして、また、朽津先生のご指導を受けることができた者にとりまして、この上もない喜びであり、心よりお祝いを申し上げます。

朽津耕三先生は、昭和26年に東京大学理学部化学科を卒業されました。大学院修了後、昭和31年に東京大学理学部助手に任ぜられ、昭和36年に講師、昭和37年に助教授に昇任され、昭和44年から昭和61年に御退官になるまで、物理化学系第3講座の教授として理学部、とくに、化学科において教育、研究に御尽力されました。その間、化学科主任、理学部長、教育計算機センター長として東京大学の発展に尽くされました。先生の教育にける情熱は、講義を通じて化学科だけでなく理学部の多くの学生に支持されていましたし、先生もそのことをたいへん喜んでおられたと聞いております。

先生の御専門は、物理化学、とくに、「分子構造」と「励起分子の動力学」とよばれる分野です。分子構造の分野では、電子回折法、マイクロ波分光法、赤外線吸収分光法などの手法を積極的に開発し、日本のこの分野の研究を世界の中で群を抜いたレベルにまで高めた功績は高く評価されています。特に、電子と光を併用することにより、分子の構造を精密に決定する方法および励起分子の動的性質を解明する方法を確立され、今日の構造化学および分子動力学の発展の基礎を築かれました。この御業績によって、山路自然科学奨学賞、日本化学会賞、東レ科学技術賞などの賞を受賞され、平成4年には紫綬褒章を授章されておられます。

国内では、分子科学研究所客員教授(併任)、分子科学研究所評議員、国立天文台評議員を勤められました。学術審議会では、学術用語分科会化学用語専門委員会委

員として、学術用語集化学編の増訂版の作成にあたりました。また、日本学術会議では結晶学研究連絡委員会、化学研究連絡委員会にて活躍されました。日本化学会においては、理事をはじめ標準化専門委員会委員を勤められ、化学で用いられる記号・単位・用語の標準化に関する活動の中心として活躍されました。さらに、化学便覧、新実験化学講座をはじめ日本化学会が編集する多くの叢書類の編集と執筆に重要な役割を果たされました。このような御功績により、平成11年3月には、日本化学会より名誉会員に推挙されておられます。

朽津先生は、数々の国際会議における招待講演をはじめとして、コペンハーゲン大学、テキサス大学、エジンバラ大学において客員教授を勤められるなど、国際的に活躍してこられました。それだけでなく、国際学術連合に関する活動を続けられ、国際結晶学連合の電子回折委員会委員長、理事を勤め世界の結晶学研究の発展に尽力されました。さらに、国際純正・応用化学連合(IUPAC)の物理化学部会において、記号・述語・単位に関する委員会委員長として物理化学で用いられる記号・用語・単位などの標準化と啓蒙普及に関する活動を推進されました。特に、5名の委員の共著として出版された、「物理化学で用いられる量・単位・記号」は世界各国の研究と教育の場で指導書として広く使用されています。平成5年には、IUPACの物理化学部会会長に選ばれ、物理化学の研究と教育の発展を目指して、国際協力活動を続けておられます。

このような御活躍が物語るように、朽津先生は、学術上、正しい表現を用いることに関して繊細な注意を払われます。大学院時代に、このような先生に、文章を添削していただきながら指導を受けた学生は、私を含め大変幸せであったと思います。また、朽津先生のお話はいつも魅力的で、特に、IUPACの委員会での御活躍や御苦労のお話はつねに示唆に富んでいます。

朽津先生は東京大学を御退官後は、長岡技術科学大学、城西大学、放送大学を中心として、学術上の御活躍ばかりでなく、多くの後進の教育に熱心に取り組んでこられました。

最後になりましたが、朽津先生が、ますますお元気で、日本の化学、ひいては教育と学術全体の発展に御活躍されることをお祈り申し上げますとともに、われわれ後進をこれまで同様に導いてくださるようお願いいたします。

佐々木互先生の勲三等瑞宝賞の受賞を祝して



樽茶清悟 (物理学専攻)

tarucha@phys.s.u-tokyo.ac.jp

佐々木互先生（理学部名誉教授）が、平成11年度の勲三等瑞宝賞を受賞されました。私たち物理学教室一同にとりまして、この上もない喜びであり、心よりお祝い申し上げます。

佐々木先生は、昭和22年東京帝国大学第二工学部物理工学科を卒業されました。同年、通信省電気試験所に入所され、電気試験所物理部電子物理研究室長、物理部低温研究室長を務められた後、昭和43年に東京大学教授として理学部に戻られ、昭和58年に定年退官されるまで、極低温物理学講座を担任されました。その後、平成3年まで東邦大学教授を務められました。この間情熱あふれる講義をされ学生に感銘を与えるとともに、研究室からは多くの優れた研究者、教育者を輩出されています。

先生のご専門は半導体物理及び低温物理です。電気通信研究所の時代からこれらの実験分野において数多くの先駆的研究をされました。まず、半導体ゲルマニウムのホット・エレクトロン効果の実験により、異方的なバンド構造に由来する輸送現象を発見されました。この研究は我が国の半導体研究の歴史のなかで特筆に値するもので、その業績に対して仁科記念賞を授与されました。その後、ドナーやアクセプターなどの不純物が極めて多く

含まれる半導体の低温での伝導現象にいち早く着目して実験的研究を展開されました。ゲルマニウムにおける負の磁気抵抗効果の発見は、不純物で支配される伝導現象を見事に捉えたもので、現在では、不規則性の顕著な導体において普遍的に生じる「弱局在効果」として知られています。当時の固体物理学では、専ら規則的な周期系の研究が行われていましたが、この発見は、その後飛躍的な発展を遂げた「不規則系の電気伝導」の研究の発端とも言うべきものです。佐々木先生は電気伝導の他にも、熱測定、磁気測定、NMR、ESRなどを駆使した緻密な測定を行われ、不規則電子系に関する実験研究の世界的な牽引役を担われました。先生の不規則系の研究は、半導体にとどまらず、金属薄膜に関する伝導の実験から、低温伝導における非弾性散乱、スピン散乱、スピン軌道相互作用などの役割を明らかにされました。このほかにも、金属超微粒子中の電子状態に関する久保効果の実験的確認、液体ヘリウム表面に浮かべた二次元電子系のウィグナー結晶の性質の解明、新しい有機超電導体の発見などの優れた業績をあげられました。これらの数々の業績を顧みますと、半導体及び低温実験物理学の発展の中で、佐々木先生が常に先駆的な仕事をされ、日本のみならず世界的に指導的役割を果たされたことは、私達後輩にとって大きな励みであり、また誇りであると思います。

佐々木先生は、大学で研究、教育に尽くされる傍ら、学術審議会専門委員、日本学術会議物理学研究連絡委員会委員、日本物理学会欧文誌編集委員長等を務められ、我が国における理学の研究、教育の整備、発展に尽力されました。国際的にも半導体、低温物理学に関する国際会議の組織運営にあたられ、会議を成功に導くのに大きな貢献をされました。先生が今後もますますお元気で、日本の固体物理学の発展にお力添え下さいますよう、お祈り申し上げます。

